
黄泉路電話

虹廻湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄泉路電話

【Nコード】

N1472F

【作者名】

虹廻洩

【あらすじ】

黄泉路電話——。あなたはしていますか？幽霊と話ができるって噂を。いつ、どこで、なにを、話せるのかは分からないその電話。そんな電話のひとつの物語。

「ねえねえ美希^{みき}、知ってる？」

「なにが？」

「黄泉路電話っていう話」黄泉路電話……

それは、幽霊と繋がる電話のことらしい。

詳しい事情は一切分からないけれど幽霊と会話ができるということだった。

「最近そういう類の話多いよね。」

私は半分呆れながら^{りんこ}燐子を見る。

「うん！そくだよね！面白いよね」

「そうかな？そんなに面白い？」

「えー、メチャクチャ楽しくない？そういう話って？」

まったくこの子は……。そういう性格なのは知ってるけれどここまで楽しそうなのはなぜなのか……

「なんでそんなにテンション上げてるの？」

「あはは、だって電話がかかって来たら楽しそうじゃない？幽霊と話せるんだよ？」

あ、またテンション上げちゃった。

「幽霊となに話すの？」

「ん〜、どうしょ、何話そうかなあ……ん〜」

腕を組みながら真剣に悩んでる……

そもそも黄泉路電話って嘘っぱいし、何？詳しい事情は分からないって……

私はそんなの興味無いし。つい最近も優しい幽霊に会ったとか言うバカがいたみたいだし……

「なにが楽しいんだか……」

教室の隅の席で窓のほうを眺める。

グラウンドで走る男子、少し離れた公園でブランコを漕ぐ幼稚園児、

古く寂れた屋敷、黒く焼け焦げた工場。

こんな、ありふれた日常に何を期待するのか・・・

抜け出したいが抜け出せない日常をなんとなく繰り返す。そんな、つまらないことを考えていると、ブウウ・・・ウとケイタイが振動する。

From 毅つよし

今日って誕生日だったよね。プレゼントしたいものがあるから会って渡したいんだ。暇なときに電話してくれない？

毅からのメール・・・

確かに今日、5月20日は誕生日だけど、プレゼントかあ。

「ん、彼氏からのメールかあ。顔がにやけてるぞ！」

隣にいた隣子が覗き込んできた。

「ち、違うって！にやけてなんかいないって！」

急に気になって頬を触ってみると明らかににやけている。

「自覚がないみたいねえ。本当にわかりやすいんだから」

隣子が言うのも仕方がないかな。自分のことなんて興味ないし・・・

毅は優しくしてくれるし、私のことを優先して考えてくれる。

だから、私は毅のことが好きなのだけれど、毅もこの気持ちは知ってるはずだ。毅は私だけを見ると言ってくれた。(後から電話しなくちゃ)ちょうど帰りのHRを告げるチャイムが鳴った。

「ん、それじゃまたあとでね、美希」

「うん。またあとでね」

幸いすぐにHRが終わって放課後になった。

私は隣子のところに行って先に帰ってくれていいからと伝えると、

屋上に向かった。

「ふう、緊張するなあ」

毅の電話番号を見付けてあとはボタンを押すだけ。

「うん。行こう」

決意してボタンを押す。

数秒たってからコール音になる。

ドキドキしながら待ちわびる。

心臓が異常なほど音をあげている。

カチャ、つと繋がるのがわかった。

「あつ、毅？私、美希だけど・・・」

「何？あなた。何で私の所にかけてくるの？」

え・・・

心臓が止まった気がした。なぜ毅のケイタイから女の声がするのか。

「ねえ、聞いているの？なんなのよ！なんで勝手に電話してきてるのよ」

「私は・・・」

「勝手に電話してこないで！もう絶対に電話しないで！したら・・・」
電話の相手の声も霞んでよく聞き取れない。

毅の彼女なのに・・・

私達は両思いなんだよね？

いや、その気持ちすら毅に遊ばれていただけだったのだろうか。
電話を切って家に向かう。

何も考えられない。

ココロガシンダ。

また、携帯が鳴った。毅からの電話だった。
今から来るようなことを言っていた。

問い詰めよう。

- 足が台所に向かう

何で女の声がしたのか。

- 目が足元の棚の包丁を見つける

脅してでも聞き出さないと。

- 手が包丁に向かう

私は知りたい。

私は遊ばれただけなのか、
なぜ私ではいけないのか。

- 家の呼び鈴が鳴る。彼が キタ。

包丁を隠して笑顔の仮面を掛ける。

- トリアエズ部屋まで・・・

毅を部屋に招き入れる。

- モウダイジョウブダ

扉の鍵を締める

「ネエ、ワタシ以外二仲ノイイ女子ツテイル？」
「ん？いるわけないじゃん」

ウソダ！

「ウソ、ツイテルヨネ？」

私を背に向けている彼に飛び掛かる。毅を押し倒し、仰向けにして喉元に包丁を突き付ける。

「ナゼワタシジャダメダッタノ。ワタシハタダアソバレテイタダケダッタノ？」

「はあ？ちよつ、そんなことあるわけないだろ、何を言っているんだ！」

ワカラナイ

「ジャア、アノコエハナンダッタノ！ワタシハアソバレテイタダケダッタンジャナイ！」

包丁を持つ手に力が一層入る。

「あの声？おい、ちよつと待てって、何を言っているんだ？」
マツワケガナイ

「知ラナイフリヲシテモワタシハ聞イタンダカラ！モウツヨシノコトナシテ信ジナイ！ワタシハアナタヲ許サナイ！」
私は包丁を振り上げた――。

『・・・続いて次のニュースです。先日起こった、同級生刺殺事件についてお伝えします。殺害されたのは市内のS高校に通う毅さん18歳です。尚、犯人は殺害された毅さんと仲の良かったとされる同じ学校に通う美希さん18歳です。殺害時刻の直前に美紀さんは携帯に電話をしたと供述。『他の女の声でしたからついカツとなつてしまった』、などと供述していますが、毅さんの着信履歴には美紀さんの電話番号は載っておらず、今後取調べを続けていく方針です。さて、一風変わって次のニュースです・・・』

その後、彼らの友人はいろいろと噂を持ち上げるが、確証の取れるものはなかった。

その真実を知っているのは『あの』電話にでた女の声だけ。

（後書き）

下手な文ですが、ここまで読んでいただいたあなたに最大級の感謝を――、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1472f/>

黄泉路電話

2010年11月17日03時04分発行